
遠く聞こえるその声は

五月 伊織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遠く聞こえるその声は

【Nコード】

N3887Y

【作者名】

五月 伊織

【あらすじ】

ごくごく稀に、シルエスト・アレイアと呼ばれるこの地へと迷い込む者がいた。彼らは皆、異なる言葉、異なる容姿、異なる習慣を持ち、元の世界へ戻れることを渴望し続けた。

雷と共に迷い込んできた彼もまた、稀人——言葉の通じぬ者と呼ばれた一人の人間だった。

<日本>に戻ることを願う少年と、彼を見守る周囲の人々、そして新たに迷いこんできた稀人のお話です。

はじまり

それはよく晴れた日だった。長い長い冬が過ぎ去ってようやく訪れた春。穏やかな日差しは暖かく、街路を歩む人々の顔は晴れやかで、活気に満ちていた。

ユリスもまた、喧騒を子守唄に窓際の席で微睡んでいた。

春を祝う祭りも近く、雪解けを待ってやってきた行商人たちは持ち込んだ衣類や装飾品を売り込むためにその声を張り上げ、地元の商人たちも負けずに祭りに新調してはと謳う。毎年恒例のその光景を見て初めて、春だと実感するのだ。大通りには若い娘たちが新しい布を求めて商人たちの間を行き交っている頃だろう。

顔を上げ窓の外から通りを眺めると、顔にかかった金髪を払いのけ、ユリスはひとつあくびをこぼした。

（そろそろ切るか）

冬の間寒いからと言い訳して伸ばした髪は既に肩にかかるほど。

決して繁盛しているとは言えぬ宿屋兼食堂とはいえ、接客業を営む者として身だしなみは大事だ。

「明日切りに行くか」

誰ともなしにつぶやき、そろそろ夕食の仕込みでもと立ち上がった時だった。

空を白く稲妻が走り、どこかに落ちたのか轟音と共に大地が揺れた。通りの喧騒に混乱と怒声が混じり始めて、ユリスは慌てて店の外へ走り出れば人々は南の方を見て、或いは指差し口々に何かを話し合っていた。

それは南の森に落ちたのだという。

季節はずれの雷に、信心深い者は神がお怒りなのだと口にしながら、大部分の人間はすぐに冷静さを取り戻し、それ以上騒ぐことはなかった。

それでも火事になつては大変だと数名の冒険者が臨時に集まり様子を見に行つた。普段から魔獣が出るとされ一般人の立ち入りが制限されているという理由もある。彼らはまるでそのあたりに散歩でも行くように「行つてきます」と住人を安心させるように笑つて森へ向かつていったのだ。

ユリスも森へと向かう一団の様子を集団に混じつて見送ると、そのまま宿へ戻り夕食の仕込みをはじめた。その程度に樂觀していたのだ。

数刻して一行が戻つてきた時、そのあまりの騒がしさに、ユリスは持ち場を離れ様子を伺いに出た。冒険者を臨時に統率していた栗毛の青年がその腕に何かを抱いていた。

<ねえ、誰かおれの言つてること、わからないの!?!>

意味の分からぬ悲痛な叫びは甲高く、その後も早口に何かが続く。困惑した声が入り交じる中、人の輪の隙間から見たのは漆黒の髪と瞳、黄色がかつた肌の子供。

「誰か、この子の言葉わからないか!」

青年の叫び声にしんとあたりは静まり返り、腕の中の子供すらぴたりと口を噤んだ。

ぐるりと人の輪に視線を巡らせ、反応がないことを確認すると彼は溜息を吐くと言つた。

「誰か、教会でも組合でもかまわない、連絡を。稀人——イスターシャだ」

<うちに帰りたいよ……>

青年の言葉に被された嗚咽混じりの子供の声が、ユリスの耳にやけについた。

イスターシャ・1

「こちらの用紙は表紙になります。読み書きは出来ますよね？ でしたらこの世界の文字でお書き下さい。こちらの用紙には、貴方の本当の名前や生まれた国のこと、家族のこと。何でもいいです。貴方が生まれた世界の言葉で、文字で、貴方のことを書き記して下さい」

ペンとインク瓶、綺麗に加工された薄桃色の用紙の束を渡して、受付の女性はゆっくりと丁寧に、修司が聞き取れるように説明する。「書き終わるまで何日でもご自由にお使い下さい」

そう言って女性は退室していく。

静寂の戻った室内は、まるでどこかのホテルのようにきれいに整えられたベッドと小さな机が用意されていた。壁紙は淡い緑色で、窓から差し込む光が温かく、微かに吹きこむ風が机の上の紙を揺らした。

用紙の一番上は表紙として名前などを書く欄が設けられていて、一通り目を通すと修司は息を吐き出して手早く記した。次のページは、自由帳のように何も書かれていない。インク瓶にペン先を浸すと、そのまま続きを書き記す。

やまもとしゅうじ
山本修司

1997年5月10日生まれ、8さいの時にここにくる。
かぞくはお父さんとお母さん、おにいちゃんといもうと。
大阪に住んでいた。小学校の名前は――

思い浮かぶことを必死に書き連ねていく。

家族の名前、住んでいた場所のこと、担任の先生やクラスの友達の名前、遠足や旅行で行った場所のこと。文字はあの頃よりもやや角張っているものの、それ以上増えることのない語彙のせいで、文

面は漢字よりもひらがなの方が格段に多かった。

遠い遠い記憶を辿り、もはや顔も声もぼんやりとしか思い出せない大切なはずの人たちのことを思い浮かべ、必死に紙に書き出した。
「くやまもと、しゅうじ」

己の名を日本語で言葉にして、違和感に舌打ちをする。かつて日常的に口にしたはずの言葉は、今や異国語だった。日常で修司が今耳にし口にするのも日本語ではなく、ウイスタリ工語と呼ばれる言葉だった。

「くでもぼくは……」

それだけをつぶやくと、また続きを書き始める。

ここに来てからどうやって過ごしたのかを。それがどれだけ楽しい生活だったのかを。

そして、どうして故郷へ、日本へ戻ることを諦めたのかを。

二刻もせぬうちに受付に姿を見せた修司を見て、女性は悲しそうに笑ってその紙束を受け取った。

「確かにお預かり致しました。これは今後この施設に展示されます。貴方の死後、指定された遺品と共にこちらに保管されることでしょう。いつか、貴方の世界からやってきた旅人に、引き取ってもらえるまで」

大切に大切に表紙以外は布でくるまれ、鍵付きの保管庫に入れられる。箱の上から女性の指先が踊り文字を記す。対象の劣化を防止する魔法だというそれは、術者の死後も半永久的に効果を残す。その魔法の対象は一切の劣化をしないのだと、修司は説明された。

「それでは、貴方の新たなお名前をお聞きしましょう」

女性の言葉に修司は舌で唇を湿らせた。

「俺の名前は、シュウ・イスターシャ。異世界からの、日本からの迷い人だ」

「確かに。ルザ・シュウ《シュウ様》、どうかこの世界で生きる貴方の生が、貴方にとって良きものでありますように。廻る星月が、

貴方を祝福しますように」

女性は<シュウ>に向けて笑って言うと、そつと手のひらを伸ばし背後を示す。

ありがとうと短く口にする、シュウはその先へ歩む。

逆光の中、十二年間養ってくれた養父は、悲しそうに笑いその大きな手のひらを伸ばしたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3887y/>

遠く聞こえるその声は

2011年11月10日01時05分発行